

近代内モンゴル知識人の民族意識について —モンゴル語教科書編纂を中心に—

烏雲高娃

東京外国語大学大学院総合国際学研究所 博士課程

緒言

中華民国初期において内モンゴル知識人は漢文化を受け入れながらもそれに対抗し、モンゴル語による教育啓蒙活動をはじめ、モンゴル人独自の固有文化を守り発展させるために様々な努力を始めた。なかでも特にモンゴル語による出版活動が必要であると考えられたため、1920年代から知識人の努力で、モンゴル語の活字印刷、モンゴル語の出版社創立、モンゴル語教科書の編纂などが実行され、内モンゴルの出版事業の幕が開かれ、文化活動はさらに展開した。それはモンゴル人という集団意識を持つ人々の育成、文化の普及、教育の発展に欠くことのできないものであった。

清末から現在に至るまでの内モンゴル人の歴史をみると、分断されたり、行政単位が何度も変更されたりして、いろいろ苦勞が絶えなかった。現在は漢化の波にさらされている。固有な歴史と文化を持っているモンゴル人はどうしたらよいか、これは大きな現代的課題である。このことをかつての歴史を踏まえながらも一回考え直してやる必要があると考えた。近代内モンゴル人が直面していた民族の独立や自治の問題についての先人たちの文化的な活動は、現在の内モンゴル人の直面している民族的アイデンティティをどう維持していくかという問題などに対して大変参考になると考える。しかし、こうした研究は、現在の中国では不可能なのである。

内モンゴルの独立や自治の運動についての今までの研究は、政治史が中心になっている。本研究はむしろ文化活動に光を当てて、近代内モンゴル知識人の民族意識と民族思想を中心に検討して、従来の研究を文化方面からの研究で補充する。この点は本研究が従来の研究と違った最も特徴的な点である。また、民主化が重視されている今日のグローバル化した国際社会のなかで、中国少数民族としての内モンゴル人の民族思想意識についての研究は重要であると考えられる。

モンゴル人の民族意識の土台は「危機意識」であるが、

この危機意識は清末の漢人農民の入植による土地問題をめぐる漢人とモンゴル人の対立、農耕文化と遊牧文化の衝突から始まった。清末新政により漢人移民が圧倒的にモンゴル地域へ流れ込むにつれ、モンゴル人と漢人の対立が激しくなり、モンゴル人社会は大きく変容し、危機感を強く感じたモンゴル人は生き残る道を模索しはじめる。そのなかで、グンサンノルブの改革の試みは代表的なものであった。しかし、グンサンノルブの改革は自分のホショー（旗）を超えることができず挫折した。1911年の辛亥革命の勃発を前にして外モンゴルは帝政ロシアの援助で独立を宣言し、モンゴル人の独立運動が幕を開いた。中華民国の下に置かれた内モンゴル人は統一と独立を目指して活動をつづけるが、それにとって文化活動は欠かせなかった。

近代内モンゴル人の民族意識の基本要素はモンゴル語とモンゴルの歴史の教育であると考えられる。それは出版、教育、教科書の内容などと深くかかわる。本研究ではモンゴル語教科書編纂を中心に、近代内モンゴル人の民族意識を検討した。

方法

近代内モンゴル人社会の情勢を視野に入れながら、内モンゴル知識人ヘーシンゲー、テムゲトらの文化活動を検討した。主に、『満蒙漢三体合璧教科書』（清朝政府学部審定の『初等小学堂教科書（漢文）』を満洲語、モンゴル語に訳し編集したものである）、『蒙文教科書』（*Mongyol udq-a-yin suryaqu bičig*）と『初学国文』（*Angqan suryaqu ulus-un udq-a*）（『蒙文教科書』と『初学国文』は、『満蒙漢三体合璧教科書』を基礎に編纂した）など一次資料を利用した。

結果と考察

1920年代という社会が激しく変動していた時代において、テムゲト、ヘーシンゲーら内モンゴルの知識人の

努力により、モンゴル語教科書編纂が実行されたが、1920年代、内モンゴルにおいて本格的に編纂が進められたモンゴル語教科書はまさに「翻訳」から独自の教科書へと移行していく過渡期であった。当時、内モンゴル社会は教育を普及させ、新しい思想・知識を受け入れることに迫られていた。これにはモンゴル語教科書編纂が不可欠であった。モンゴル語教科書編纂は、最初は主に中国語からモンゴル語への翻訳によって行われていた。清末に出版された『満蒙漢三体合璧教科書』は中華民国時期のモンゴル語教科書の編纂に対して重要な意味を持っていた。中華民国時期のモンゴル語教科書編纂は直接や間接に『満蒙漢三体合璧教科書』の内容を基にしていた。テムゲトとイデチンは『蒙文教科書』（1923、漠南景新社）を編集した際、1917年に商務印書館により編集出版された『漢蒙合璧国文教科書』を通じて間接的に『満蒙漢三体合璧教科書』の内容を基礎しているが、ヘーシンゲー、ロールガルジャブは『初学国文』（1929、東蒙書局）を編集出版したとき直接に『満蒙漢三体合璧教科書』を参照していたことからその「温度差」が察せられよう。

要 約

『満蒙漢三体合璧教科書』は中華民国時期のモンゴル語教科書の編纂に対して重要な意味を持つことを指摘し、1920年の内モンゴルにおける出版事業の発端であり、モンゴル語教科書編纂において多大な役割を果たした代表的な知識人のテムゲト、ヘーシンゲーを取り上げ、彼らの文化（出版）活動についてモンゴル語教科書編纂を中心に考察した。この中の具体的な内容「中國」に焦点を与えながらモンゴル語教科書編纂を考察し、1920年代内モンゴルにおいて本格的に編纂が進められたモンゴル語教科書はまさに「翻訳」から独自の教科書へと移行していく過渡期であったことを論じた。

謝 辞

本研究を実施するに当たり、公益財団法人三島海雲記念財団平成27年度学術研究奨励金の助成を受けました。研究奨励金をいただき、モンゴル国で行った国際研究会と日本の日本モンゴル学会で発表し、これを基礎に論文を完成した。公益財団法人三島海雲記念財団の皆様により深く感謝申し上げます。